
気まぐれ猫の散歩

月猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれ猫の散歩

【Zコード】

Z3341Z

【作者名】

月猫

【あらすじ】

人に疎まれ、苦しい思いをしてきた、元猫・現在妖怪の彪ひょう、妖怪や、靈が見えてしまい、気味悪がられてきた両親のいない少女、ほたる。

そんな2人が出会いつて、いろいろと学んでいきます。

記憶（前書き）

初めまして。月猫いねねこです。
思いつきで書いてるので、べのへりこ続くかペリコーですが・・・
宜しくお願ひします。

辛い事、悲しい事、いろいろあつたさ。人は、嫌いだ。ずっと一緒に言つて、優しいフリしてすぐ裏切る。もう期待して、裏切られるのはごめんさ。なのになぜ、こんなことになつたのかな・・・？誰か教えてよ。

私の名は、彪ひょう オス。1番最初に、飼つてくれた人がつけてくれた。1番はじめに飼つてくれたのは、年老いた、おばあさんだつた。わたしは、まだ子猫だつた。この人は優しくしてくれた。まだ目も開かないうちに捨てられた私を。幸せだつたけど、そう長く続かなかつた。おばあさんが死んでしまつた。引き取り手がないわたしは捨て猫となつた。

そうしているうちに、今度は男の子に拾われた。大切にしてくれたけど、大きくなるにつれて、相手にしてくれなくなつた。そして、疎まれるようになつた。この時、わたしは4歳。男の子の家を飛び出し、再び、捨て猫となつた。

次は、大人の男に拾われた。男は一人暮らしをしていた。アパート暮らし。狭くて、汚い部屋だけど、仲良く暮らししていた。けれど世の中は、不景気になつていた。男は、会社をリストラされた。1日中家について、段々と私にハツ当たりするようになつた。酒癖も悪くなつていつた。ある日、いつものようにハツ当たりされた。抵抗したけど、意味は無く・・・。そして私は死んでしまつた。私が7歳の頃。

死んでもらも、死にきれず、ついに・・・。妖怪となつてしまつた。妖怪となつた私はもう、猫ではない。真っ白で、トラック1台分はある。耳は後ろに倒れ氣味で、尾は長く、フサフサ。大犬の姿に似

ていた。それでいて、猫の姿おとこにも戻れる。白くて、丸い姿に。尾は、丸くて短いけれど。何やら妖力おとからも強いようだし……。これなら、もう、人の世話になんかならなくて済む。私は自由になつた。

せたるの#貼りみ（福井）

更新遅れて、すみませんでした。
これからもいろんなことがあつたりするかも知れませんが、よろしく
お願いします。

ほたるの話しみ

5歳の頃、私は両親を亡くした。

五ヶ瀬ほたる。中学2年生。

わたしには、秘密がある。それは、この世の者でないもの。

信じてもらえないだらうけど、妖怪や、靈が見える。

両親を亡くしてからは、親戚を転々としてきた。しかし、わたしは妖や靈を見る、不気味な子。周りの人から見たら、嘘つき、氣味悪い、変な子、というふうでしかない。そのため、だれもきちんと引き取ったがらなかつた。

今住んでいる家の人は、母方の遠縁。今までにないくらい、優しい人たちだつた。こんなにいい家はない。ずっとここにいたい。この人たちに、不気味な思いはさせたくない。そう思つて、妖怪や靈を見る事は、秘密にしている。

けれど、家にいたら、いつかその事がバレそうで・・・。学校が終わると、近くの森の中で過ごす事が多くなつた。

またの頃（後書き）

感想待つてます

出合った

今日は、雨が降っている。普通だつたら、森になんか行かない。ほ
たるは、森の入口で立ち止つた。

普通だつたら・・・。

そう思つていたのに、森の中に入つて行つてしまつた。

来てしまつた・・・。

とにかくため息をつくしかない。まあ、雨も少ししか降つていない
し、少しくらい良いか。

その時だ。

ドスン！――！

後ろで音がした。ドキドキしながら、恐る恐る振り向く。そして悲
鳴を上げそになつた。思わず腰が抜けた。後ろにいたのは・・・。
大きな獣だつた。白くてとにかく大きい。目は、銀色。耳が後ろに
倒れ氣味。尾がとにかく長い。

「む。なんだ、人の子か」

低い声。多分これは・・・。

「妖怪なの？」

「当たり前だ」

「当たり前だ」

そりや、そりや、どうだらう。これが、普通の動物なわけがない。

「お前には、私がみえるのか？」

「まあ・・・」

話も出来るし、見えている。

「雨が降つてゐるのに、何をしている」

そこまで来て、やつと落ち着いた。はたるは立ち上がる。

「関係ないでしょ」

「ふん。ふてぶてしい奴だ」

そんなこと、妖怪に言われたくない。

「あんたこそ、突然何よ」

「少し散歩していただけだ
そういえば、コイツには話が通じる。またね、もつ少し話してみ
ることにした。

稻荷神社で・・・。

雨がやんだ。ほたるは傘を閉じた。

「さつさと帰れ」

大きな獣が言った。

「なによ。ここにいてはだめなの？」

ムツとしたように聞いた。

「お前、人間だろう？私が怖くはないのか？」

「そりゃあね。怖いけど。でも、私の事を食べたりしないでしょ？」

大きな獣がため息をついた。

「ふふ。妖怪とこんなに長くはなしたの、初めてだよ。あんた、名前は？」

大きな獣はじつとほたるを見つめた。そして突然・・・。

どろん

小さな猫になつた。

「わあ・・・。なんなの？その姿」

「気にするな。どちらも本当の姿だから。私は彪だ」

「私、ほたるつていうの」

猫姿になると、あまり表情が変わらない。

「では、ほたる。人の子があまりここへ、一人で来るんじゃない」

「なぜ？」

「ここには妖が多い。見えるお前など、食われてしまつかもしれないぞ」

彪は口を細めてからかうような口調で言った。

「そうなの？忠告ありがとう。でも、ここはわたしの大切な居場所でもあるの。・・・ねえ、明日も来ていい？」

「私はここへは来ないよ」

そう言われても、ほたるは来るつもりだった。それが彪にも伝わっている。

「バイバイ、彪

ほたるは手を振つて別れた。

帰り道。かなりテンション高めで歩いていた。

「そこの人の子」

突然横から声がした
ほたるかき。N君。N君た

一不乎しが

精一杯叫んでいる声のする、
さな祠のある稻荷神社だった。

「おーーーーーい。人の子ーーーーー」

小さな声

ほたるは恐る恐る、足を踏み入れた。そして、祠の前に来た。

「え――つと・・・」

「ううん、だんだん」

「ふう。かつ、ハラゲ付ニシモト下の方からだ。下を見ると、

「・・・わあああああああ！？・・・と。小さな妖怪か！」

祠の下には、着物を着た小さなおじさんがいた。じつは、このにも、

もう慣れた

「うーむ。やつぱり、見えるのか」

おじさんが言つた。

見えなよ 私はほたる ··· ··· 君の名前は?」

力を貸す？今までそんなこと、言われたことない。

「……厄介なことじや、ないよね。あまり関わりたくないような・

13

「そんなこと言はずに。忘れられたこの場所に住んでる、わたしのたつた1つの願いなのだ」

たつた11の願いなのだと
葛の木は泣きながら言つた

「分かつたよ。何すればいいの？」

「おお。ありがたい。手伝ってくれるか」

葛の木は大喜びしている。ほたるは、はあーっとため息をついた。

稻荷神社で・・・（後書き）

どうだったでしょうか。感想、意見頂けたら嬉しいです。

彪が猫姿の時の姿には、いろいろ理由がありますが、私の想像した
のだと・・・。

尾が短いのは、野良猫時代にケンカして・・・。ということです。
街中でそういう猫がいると悲しくなります。太っているのは、人間
から解放されて、沢山美味しいものを食べたから、という設定にし
ています。

また、読んで頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3341z/>

気まぐれ猫の散歩

2011年12月16日16時46分発行